

古田史学の会・東海

東海 の 古 代

第144号 平成24(2012)年8月

会 長：竹内 強

編集発行：事務局 〒489-0983 瀬戸市苗場町137-10

林 伸禧 〈Tel&Fax：0561-82-2140、メールアドレス：furuta_tokai@yahoo.co.jp〉

ホームページ：http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

古田武彦講演会を開催しました

— i n 第24回愛知サマーセミナー2012 —

愛知県内の私立高等学校の先生・生徒等が中心となって、「みんなが先生、みんなが生徒」を合い言葉に開催された「愛知サマーセミナー」に、今回は古田武彦先生をお招きして、「古田武彦講演会」を開催しました。その状況は次のとおりでした。

1 日時等

日 時	平成24年7月15日(日)
時 間	13時10分～16時10分(第3・4限)
会 場	愛知東邦大学(B棟 B101)

2 受講者数

時 間	高 校 生			一 般			合 計			備 考
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
第3限	1	1	2	78	20	98	79	21	100	一般に会員を含む
第4限	—	—	—	58	8	66	58	8	66	
合 計	1	1	2	136	28	164	137	29	166	延人数

※実人数：118人

3 講演会を開催して—40年の夢の実現—

会長 竹内 強

昨年の第23回のサマーセミナーで来年は、古田武彦先生を招いて高校生やサマーセミナーに参加した市民に古田史学について聞いてもらいたいと公言してきました。

その後、機会ある事に講演を実現したいと訴えてきました。一方でサマーセミナー実行委員会には先生を特別講師として呼んでほしいと知り合いの先生を通して依頼し、直接手紙も出し実現に努力しました。ところが、セミナー実行委員会からOKが出た5月中旬、古田先生ご自身が北多摩病院に入院されセミナーへの参加の返事がなかなかいただけない事態となりました。急遽東京まで行き、担当の医師とも相談し何とか出席を約束してもらいました。

ところが、準備を進めている6月初め今度は私自身が腹痛に襲われ、胆石と診断されました。一度は内視鏡による手術をし、これで治ったと思ったのですがその後も何度か腹痛がつづきそのたびに救急車のお世話になり、結局は胆嚢切除の開腹手術をしました。退院が講演会の前日、7月14日となってしまいました。当日何とか参加できたのですが、「古田史学の会・東海」会員の方々に多大な迷惑をかけてしまいました。

私事ではありますが、古田先生の講演を開くことは、私にとって40年来の夢でした。私の在学していた大学は浄土真宗系で親鸞聖人の宗教も単位に含まれていました。当時、いろいろな人が親鸞について書いていましたが、その中に「古田武彦」の名前を見つけました。論理的で単なる宗教者としての親鸞を捉えるのではなく、人間としての親鸞をその中に見つけることができ、是非このひとを大学祭の特別講師に呼ぼうと計画しました。ところが、当時の大学紛争は、よそ事ではなく我が校でも嵐のように吹き荒れました。結局大学祭そのものが中止になったのです。あれから40年やっと難産ではあったけれども「古田武彦講演会」を実現させることができました。関係者の皆さんに心からの感謝を申し上げます。

暑い中、高齢にもかかわらず京都から駆けつけて下さった、古田武彦先生には心から感謝し、今後とも古田史学の発展と先生の学問をひとりでも多くの方に広めることをお誓いし、筆を置きます。

4 受講者の感想

感	想	年令
・ 貴重なお話、ありがとうございました。		21
・ 邪馬臺ではなく、邪馬壹だったとは、それだけでも私にとって発見です。		41
・ サマーセミナーの存在自体は、今回初めて知りました。 ・ 非常に有意義で内容の濃いものであり、今後も続けて欲しいです。		46
・ 以前古代史に興味があつて、様々な本を読みました。その中には古田先生の著書もあり、今回先生の講座があると知り、なつかしく感じながら参加させて頂きました。 ・ 最近忙しさから、古代史から遠ざかっていましたが、今回の講座をきっかけとして改めて勉強を試みようかと思っています。 ・ 本日は貴重なお話をしていただき、ありがとうございました。		52
・ とても楽しくわかりやすい講義をありがとうございました。 ・ 昔、一時期福岡市に住んだ時期がありまして、大野城山に何回か登りました。山を取り		54

<p>巻く「土塁」の途中、「百間石垣」がありました。谷の部分を渡る水門です。後日、「雷山」だと思いましたが、「神護石」を見た時、やはりその水門の部分がそっくりだったと思いました。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 昔のあいまいな記憶のままではありますが、大野城山(地元では四王寺山^{しおじやま}と呼ばれますね。)山城と神護石は同じ仲間なのだと思います。だから四王寺山をもっと注目してよいのになあと思います。水城にもつながっていることですし…… • また、石や土塁で囲むことにつままして、敵が上ってくるのをさまたげる為もあるかもしれませんが、それよりも味方がぐるっと回って警護しやすいというのが、一番なのではないのかなあと思いました。山を歩いていて、そう思いました。 • お釈迦様の話はとてもおもしろかったです！ 	
<ul style="list-style-type: none"> • 古田先生の“説”大変興味深く聞かせていただきました。 <ul style="list-style-type: none"> ◦ 台国でなく壱国 ◦ 大和 ヤマトにつなげるため ◦ 里程の解説 等 諸説、新鮮でした。 • しかし、何故、古田説が広まらないのか！？ ??? 	5 9
<ul style="list-style-type: none"> • 邪馬壹国の話もおもしろかったが、最後の経済の話や世相の話が非常によかった。 • この様な話をもっと聞きたかったです。 	6 5
<ul style="list-style-type: none"> • 通説の「邪馬台国」ではなく、「邪馬壹国」という考え方や「ひみこ」と呼ぶのではなく「ひみか」という、古田先生の話聞いて、目からウロコの面があった。 • 邪馬台国は「大和説」が有力であるとの最近の論調であるが、九州説についても再評価すべきと思われた。 	6 5
<ul style="list-style-type: none"> • 古代史の面白さ、いろいろな背景、文献、文字、地理、考古(発掘品)等からどう読み説いていくか、どう推理して論理を組み立てていくか……… などの一端を学ばせていただきました。 • また、考えることの大切さについても………。 	7 2
<ul style="list-style-type: none"> • 主人が九州王朝論を信じて、古田武彦氏の著書が沢山我が家にあります。主人は2年前に故人になりましたが、私が大分県(宇佐市)出身ですので、宇佐神宮、佐賀(吉野ヶ里)、福岡の方面に巡った事もあります。 <ul style="list-style-type: none"> ※宇佐市方面では卑彌呼は実は神功皇后だった説迄あります。九州の宇佐八幡宮に神功皇后がまつわれています。なぜか?? • 主人(故人)はフランス文学を専攻したのに、近年古代史を深く学び、奈良方面へも出向きました。 本日受講出来ました事、深く感謝いたしております。 • この機に我が家の古田武彦氏の本を読んでみようと思います。 • 益々のご活躍を祈っています。どうぞ、古田先生の健康に留意され、その道を極める方々の道しるべであり、続けて下さいませ。 	7 4
<ul style="list-style-type: none"> • 魏志倭人伝や詩経などの古文書を基にしての邪馬壹国の話はとてもよく解り、興味深く、納得出来ました。私共は皇国史観で育って来ましたので、意識を新たにすることが出来、 	8 3

<p>有意義な講義を拝聴出来、有難うございました。</p> <ul style="list-style-type: none"> しかし、先生の批判された宗教、特に仏教(釈迦)に対する考え方には承服し兼ねました。唯物的に宗教をとらえられるのは、どうかと思います。倫理・科学・芸術・宗教それぞれ別分野、別の視点で、分野のものですから、考えて欲しいと思います。 しかし、究極には、真善美は一致すべきで、これは人類永遠のテーマであると思います。この時代こそ宗教は必要ではないのでしょうか。 	
<ul style="list-style-type: none"> よい話であった。「老いても学ぶ」お手本を見せていただけて、感謝します。 親鸞で知った先生のお考えが、古代史でもご活躍という事を知り、もっといろいろと勉強したいと思いました。 ありがとうございました。今後がんばって「研究」してください。 	—
<ul style="list-style-type: none"> 本日の話の内容は、これまでの先生の著書で大方知っていました。ただ、先生の誠実な話しぶりに改めて感じ入り、先生がこれまで説いてきた学説をいっそう正しいと改めて思いました。 “真実の学問”めざして、もっと先生の本を読んで“真実の歴史学”を学んでいきたいと思っています。 	—
<ul style="list-style-type: none"> 子供の頃に読んだ『「邪馬台国」はなかった』は衝撃でした。その先生の話聞くことができ感激です。 いろいろな新しい話もきくことができ、ためになりました。 	—
<ul style="list-style-type: none"> 古田先生のお話に、その生き方に感動しました。 	—
<ul style="list-style-type: none"> 長年の古田先生のファンです。 ひさしぶりに先生の古代学の出発点となった邪馬壹国の話にふれて楽しくかつ刺激的な時間を過ごす事ができたことにありがとうございます。 	—

5 古田先生に対する質問

先生は、後日質問者に直接回答されることでした。

質 問 内 容
<ul style="list-style-type: none"> 浜名湖付近を中心に“三遠式銅鐸”というものが分布しているが、それらを遣した勢力はどのような勢力であったか？ 古田氏は『ここに古代王朝ありき』の中で、近畿銅鐸圏が東にズレていったものの一つであると位置づけているがそのようにいう根拠はどのようなところにあるか？ また、“三遠式銅鐸”を遣した勢力を調べるための史料はあるか？ <p>以上わかる範囲が教えていただければ幸いです。</p> <ul style="list-style-type: none"> 尚、私は“三遠式銅鐸”の一つが発掘されたという豊田市に住んでいるものです。 <p>“三遠式銅鐸”分布の勢力圏を調べることによって、郷土の古代の様の一端が分かるのではないかと考えています。</p>

- ・一大国は天国の判じ物ではないのでしょうか？
一十大=天、つまり一大国は天国。

- ① 邪馬壹国は博多湾岸、筑前中城なら
- ② 卑弥呼は筑後風土記の、もし、ミカ依り姫(アラブル筑後国の祝)
①≠②

PS 尚、私の説は九州天皇説(『平和の扉』参照)

※(編集者注)『平和の扉-東アジアの起源と飛躍-』(博栄出版, 1987(昭和62)年3月)

- ・清水書院刊の『親鸞』に導かれて、古田武彦さんの考えに興味を持った。今回の魏志倭人伝の読み方も、情けないことですが、読み下し文や解説に頼っていたので、漢文をよく読めなかった。
- ・「区間里程」概念図……先生の説で、一里が当時は今の半分の7.5mとかいう本を読んだのですが、今回のお話とどうつながっているのかよく分かりません。
- ・これからももっと勉強してみたいです。
- ・なかなか、お元気なお姿を見て、うれしくなりました。反骨の古田さんの今後のご活躍を期待しております。
- ・今日、お会いできて、うれしかったです。

- ・「壹」という字の構造からのご説明がありました。卑弥呼の時代において、魏と倭国で文字は共通して利用されていたのでしょうか？
- ・文字についての解釈、意味合いは共有できていたのでしょうか？

- ・ジャパン・アズ・NO1として世界一流だった日本の経済が最近下降気味です。
- ・古代史とは直接関係ありませんが、古田先生は最近の日本の経済・景気などについてどのように考えられているのでしょうか。

『隋書』倭國伝の竹島と躡羅國

名古屋市 石田敬一

1 はじめに

“『隋書』倭國伝の竹島について”(『東海の古代』第138号、2012年2月)において、私は、『隋書』倭國伝の記述「明年上遣文林郎裴清使於倭國度百濟行至竹島南望躡羅國經都斯麻國迺在大海中」にある竹島は、その行程を考えると、この朝鮮半島南西部にあるとしました。

そうした考えの上で、次の3カ所に「竹島」



韓国コネスト地図における竹島

の名称を確認し、現地名からも朝鮮半島南西部に竹島は存在することを示しました。

- ① チヨルラナムド ヨングァンゲン ナゴルミョン チュツトリ チュクド 全羅南道 靈光郡 落月面 竹島里・竹島
- ② チヨルラナムド チンドグン チョドミョン ウェチュクド 全羅南道 珍島郡 鳥島面 上竹島
- ③ チヨルラナムド チンドグン チョドミョン メンゴルトリ 全羅南道 珍島郡 鳥島面 孟骨島里 竹島灯台

さらに、“『隋書』倭國伝の竹島について その2”で、島・山・村・地形の名として、朝鮮半島南西部の全羅南道に竹島の名称が集中して、20カ所*1も現存することを示し、朝鮮半島南西部の地域は竹島と呼ばれていることを追認しました。

通説では、『隋書』倭國伝の竹島の位置については曖昧にされてきたのですが、朝鮮半島南西部に集中的に竹島の地名を確認できたことよって、竹島の位置を朝鮮半島南西部に特定できたとは私は考えています。

再度『隋書』倭國伝の記述について私の考えを示します。

明年上遣文林郎裴清使於倭國度百濟行至竹島南望舩羅國經都斯麻國迥在大海中

明年、上、文林郎を倭國への使いとして遣わす。百濟に渡り、竹島に行き、南に舩羅國を望み、都斯麻國を経て、廻かに大海の中に在る。(読み下しは筆者による。以下同じ。)

これは、多利思北狐の朝貢のあくる年の六〇八年に、煬帝が文林郎の役職である裴清を使いとして倭國に遣わしたことを記述したものです。隋から百濟に渡り、竹島に行き、都斯麻國を経て、倭國は廻か大海の中に在ることを示しています。竹島から都斯麻國の途中では南に舩羅國(通説では濟州島)を望むとされます。

この記述の後には、竹斯國、そして秦王國などの附庸國の状況、さらには倭國の都まで行ったことや倭國の生活などについて詳細に記述されています。

『隋書』倭國伝の竹島がどの辺りにあるかについて、南に濟州島とされる舩羅國を望むのですから、朝鮮半島の南西端に近いと理解してい

ましたので、その竹島の地名を朝鮮半島南西部一帯に発見したときに、『隋書』倭國伝の竹島はここで間違いないと確信できました。

そもそも、これまでの通説では、現在の日本における地名を調べ、この地域に竹島という地名が見あたらないので、『隋書』倭國伝の竹島の位置はわからないと曖昧にされてきたのです。

私は『隋書』倭國伝の記述にある百濟から倭國に向かう航路、および朝鮮半島南西部に竹島の地名が現存することの2つの根拠から、『隋書』倭國伝の竹島は、朝鮮半島の南西部にあることの妥当性を示すことができたと考えています。

それは、とりもなおさず、煬帝の使いである裴清は、隋から黄海を渡って百濟へ行き、百濟から朝鮮半島の西側の海岸に沿って南下し竹島へ行き、舩羅國を南に望み、都斯麻國を経て倭國に向かう航路が、次の図のとおり、明確にされたということです。



※ yahooの地図を利用。

2 度百濟

私は、先の『隋書』倭國伝の記述について、隋から「百濟に渡り」と読みましたが、ここで注意を要するのは、「百濟を渡り」と読み下すことが通例となっていることです。以下に2つの代表的な例を示します。

*1 「竹島 全羅南道」でヒットした23カ所のうち、竹島船着場2カ所、竹島漁民福祉会館の3カ所を除く20カ所。

A 明年(大業四年、推古十六年・六〇八)、上(煬帝)は文林郎裴清(裴世清)を遣わして倭国に使させた。百済を渡り、竹島(絶影島か)にゆき、南に躰羅国(耽羅、濟州島)を望み、都斯麻国(对馬)をへて、はるかに大海の中にある。また東にいて一支國(吉岐)に至り、また竹斯国(筑紫)に至り、また東にいて秦王国(畿島・周防、秦氏の居住地か)に至る。その住民は華夏(中国)に同じく、夷州(いまの台湾)とするが、疑わしく明らかにすることはできない。また十余国をへて海岸に達する。竹斯国から以東は、みな倭に附庸する。

(『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』、岩波文庫、1951年11月、下線は筆者による。以下同じ。)

B 明年、上、文林郎裴清(裴世清)を遣わして倭国に使いせしむ。百済を渡り、行きて竹島に至り、南に躰羅国を望み、都斯麻国の、廻かに大海の中に在るを経。又東して一支国に至り、又竹斯国に至り、又東して秦王国に至る。其の人華夏に同じ、以て夷州となすも、疑いは明らかにすること能わざる也。又十余国を経て、海岸に達す。竹斯国自より以東、皆倭に附庸たり。

(『倭国伝』講談社学術文庫、2010年9月)

Aは広く一般に知られる岩波文庫の文庫本です。研究者を含め多くの人がこの本を参考にされていると思います。また、Bは最近、再版された講談社学術文庫で、これは「中国の正史に描かれた日本」に関する史書を網羅しており、原文、読み下し、現代語訳が記載された便利な本です。

いずれも、読み下しに、少なからず問題点がありますが、それらは別項に譲るとして、今、問題とするのは「度百済」の読みです。「度」は「渡」の減筆体と思われます。その上で「百済を渡り」と読んでいます。「百済を渡り」はどんな状況をイメージして読み下しているのか私には理解できません。「百済に渡り」でないという意味が通じないように思います。

これらの図書が「百済を渡り」と読んだ理由として考えられることは、百済を陸行で横断す

るという解釈だと想像されますが、もしそうだとすれば、これは明らかに間違いです。「渡」は陸行では使用されません。「渡」は海を越えるときに使われる語句です。

事例をいくつか示します。

C 百殘新羅舊是屬民由來朝貢而倭以末卯年來渡海破百殘加羅新羅以為臣民 (『好太王碑』)

百殘、新羅は古くは是れ(高句麗の)属民の由、朝貢に來たり。而して倭が辛卯年に海を渡り來て百殘、加羅、新羅を破り臣民となす。

D 始度一海千里至對海國 (魏志倭人伝)

はじめて一海を度ること千里にして對海國に至る。

E 又南渡一海千里名曰瀚海 (魏志倭人伝)

また南に一海を渡ること千余里、名を瀚海という。

F 又渡一海千里至末廬國 (魏志倭人伝)

また一海を渡ること千里にして末廬國に至る。

G 女王國東渡海千餘里復有國皆倭種

(魏志倭人伝)

女王國の東、海を渡ること千余里復た國有り。皆倭種。

H 度海千里復有國皆倭種 (『魏略』)

度海千里にしてまた國有り。皆、倭種。

I 東北至新羅 西渡海至越州 南渡海至倭國 北渡海至高麗 (『旧唐書』)

東北は新羅に至る。西に海を渡るに越州に至る。南に海を渡るに倭國に至る。北に海を渡るに高麗に至る。

J 天監六年 有晉安人渡海為風所飄至一島

(『梁書』)

天監六年、晉の安人有りて海を渡り風に飄う所と為し一島に至る。

以上のとおり「渡」は海を越えて航海する場合に使う文字であり、朝鮮半島の陸地を横断す

る場合には使われません。したがって隋から「百済に渡り」が適切な読みであろうと思います。

3 竹島の読み

『隋書』倭國伝における竹斯國の表記については、現地名の筑紫^{ちくし}の発音に忠実です。「ちくし」です。この「竹」と同じ字を使用した竹島についても、平等に「竹」を「ちく」と読むのが適切だと考えます。

現在の朝鮮半島は韓国領土ですから、竹島は韓国語で発音されます。竹島を「죽도」(tɕukdo)と発音します。カタカナで表示すれば「チュクド」です。これを漢字で表現したのが竹島ですから、隋の時代に竹島は「チュクド」若しくは「チュクド」と似た発音「ちくとう」で呼ばれていたと考えられます。現地では竹島を「チュット」に近い音で発音される場合があります。例えば、竹島里は「チュットリ」です。実際に口に出して発音を聞けば「チュクド」や「チュット」は、日本語読みの「ちくとう」に似た発音だと思えます。

一般論として、韓国語読みと日本語読みには、似通ったところがあります。例えば新羅は、奈良時代までは「しらき」、近年は「しらぎ」と読まれています。字の如く読めば「しんら」です。韓国語では「シーラ」「シルラ」、日本語読みと似ているように思えます。高句麗は朝鮮では「コグリョ」、日本では「こうくり」です。やはり似通っているように思えます。

『隋書』倭國伝には、竹島の読みが明示されているわけではありません。竹斯を「ちくし」と読むのであれば、竹島の「竹」を「ちく」と読んで「ちくとう」とするのが自然です。「たけしま」と読む理論性は全くありません。もし、この地が日本領として続いていたと仮定すれば、今でも「ちくとう」と発音されていたのではないのでしょうか。いずれにしても「ちくとう」は現在の韓国語の「チュクド」の発音に近いと私は思います。

『隋書』倭國伝の竹斯を現地名の筑紫^{ちくし}を忠実に表記したものとすれば、同じ文字「竹」を使った竹島も現地名の忠実な表記であると考えべきです。竹斯を「ちくし」と読むのであ

れば、竹島の竹は「チク」であって「ちくとう」と読む、これが自然な感覚であり、当然の結論であろうと思います。

今問題の竹島が『隋書』の時代に百済領であったのか倭國領であったのか、『隋書』倭國伝の記述からだけでは、わかりません。ただ、この竹島が百済領であるか倭國領であるかに関わらず、現在、竹島という地名は朝鮮半島の南西部にあることは紛れもない事実です。『隋書』倭國伝における竹島について、その記述に沿い、かつまた朝鮮半島の南西部に竹島の地名が現存しているのですから、竹島が朝鮮半島南西部に位置することを否定できないと思います。

4 『隋書』百済伝の舩牟羅國

『隋書』百済伝に記述されている舩牟羅國について、百済から「南三月行」と記述されますので、舩牟羅國は相当南の方にあるとする考え方があります。

しかし、その記述をつぶさに読めば、舩牟羅國は済州島の可能性が高いように思われます。

其南海行三月有舩牟羅國 南北千餘里東西數百里 土多麋鹿附庸於百濟 百濟自西行三日至貊國千餘里云

(『隋書』百済伝)

その南、海行三月に舩牟羅國があり、南辺、北辺が千余里、東辺、西辺が數百里、土地には麋鹿^{ノロジカ}多く、百済に従属す。百済を西より行くこと三日、貊國に至るに千余里と云う。

舩牟羅國には麋鹿^{ノロジカ}が多いという記述があります。麋鹿は、ユーラシア大陸中高緯度の中国や朝鮮半島の草原に生息する小型の鹿です。今も済州島には、臀部が白く尾が短いノロジカが生息しています。

これに対して、マレーシアやインドネシアなどの南方の国々に生息する鹿は、立派な角をもつ大型のルサジカ、短い角と眼下腺が特徴の小型の鹿であるホエジカ、超小型のマレーマメジカであり、ノロジカは生息していません。つまり『隋書』百済伝で記述される麋鹿^{ノロジカ}の生息区域から考えると、舩牟羅國は、済州島の可能性が大きいと考えられます。

なお、ノロジカは中国本土にも生息していますので、中国人の著者はノロジカであることを判別でき、『隋書』百済伝に麋鹿ノロジカと明確に記すことができたのだと思います。



ノロジカ



ホエジカ



ルサジカ



マメジカ

『隋書』百済伝には、舩牟羅國の記述が、もう一カ所あります。

平陳之歳 有一戰船漂至海東舩牟羅國 其船得還經于百濟 昌資送之甚厚 并遣使奉表賀平陳
(『隋書』百済伝)

陳平定の歳、一艘の戦船有り、海東の舩牟羅國に漂着し、其の船百済を經由し還るを得、昌資財を送りこれを甚だ厚遇し、併せて遣使を奉表し陳平定を祝賀す。

これは隋が南朝最後の王朝である陳を滅ぼし、中国を統一した際の話です。隋の戦船が海東の舩牟羅國に漂着し、その船が百済を經由して還る内容です。百済を經由するわけですから、舩牟羅國は百済に近いところに位置していると考

えられます。もし舩牟羅国がもっと遠く南方の島であるとすれば、漂着した戦船を、百済経由で中国本土に還すような危険を冒す意味がありません。直接中国本土に帰港させるほうが航路が短く安全ですから、わざわざ百済を経由させるのは無理があると思います。

これに対して、舩牟羅国が済州島であるとするならば、朝鮮半島の西側の海岸伝いに遂行し、百済を経由して山東半島に渡る安全な航路となり、百済を経由する意味がよく理解できます。

また黒潮は南から北へ流れているので、漂流する戦船が中国大陸近くから南方の島に漂着するというのは考えられませんが、黒潮や対馬海流に乗って済州島に漂着するというのであれば北の方向に流れる海流の状況から十分に理解できます。



海東と海南

また、よくよく記述を見れば、舩牟羅国は隋よりさらに南方にある南海の島ではないことが明らかです。先に示したとおり『隋書』百済伝には「隋の戦船が海東の舩牟羅国に漂着」とあり、舩牟羅国は隋の海東に在るのです。海南の島ではあり得ない決定的な記述です。これに注目し正確に記述を理解すべきでしょう。

ノロジカの生息とともに戦船の帰航の経路、黒潮の海流、海東の位置の4つの点から舩牟羅国を済州島であるとするのが私はふさわしいと思います。

5 『三国史記』新羅本紀の耽羅國

耽羅國主佐平徒冬音律【一作津】來降 耽羅自武德以來臣屬百濟故以佐平爲官號 至是降爲屬國

(『三国史記』新羅本紀)

耽羅王、佐平(百済の官名)の徒冬音律が来降す。耽羅は武德以来、百済に臣属の故に佐平を官号と為す。是に至り降って(新羅の)属国と為す。

『三国史記』新羅本紀のこの文武王二年(662年)の記述によれば、耽羅國は、武德(618~626年、唐の年号)より以来百済に属していたとされます。それが百済が滅びたため、百済の属国を降りて新羅の属国になったことが示されています。百済の属国から新羅の属国になったということは、耽羅國は、百済からも新羅からも比較的近いところに位置していたと推測されます。遠く離れたところでは、百済や新羅の属国にはなりえないでしょう。耽羅國にとって属国になる必要もメリットもありません。この記述は百済や新羅から遠く離れたところに耽羅國は存在しないことを裏付けると思います。

6 『三国史記』百済本紀の耽羅

王以耽羅不修貢賦親征至武珍州 耽羅聞之遣使乞罪乃止 耽羅即耽牟羅

(『三国史記』百済本紀)

百済王、耽羅が貢賦を修めず、以て武珍州(現在の光州)に親征す。耽羅は之れを聞き使いを遣り罪を乞う。乃ち止む。耽羅は即ち耽牟羅なり。

耽羅と耽牟羅は字が異なるので、異なる所を指すという解釈がありますが、『三国史記』百済本紀の記述には、耽羅は即ち耽牟羅であると明確な記述があり、これに従えば耽羅と耽牟羅は同一の所を指しています。

一方、耽羅が耽牟羅と異なるという記述は、中国史書には全くありません。中国史書に忠実に従う限り耽羅と耽牟羅は同じところです。

ここで、「耽」は「たん」と読まれ、「舩」の異体字とされますので、耽羅は舩羅、そして耽

牟羅と舩牟羅は同一と考えてよいでしょう。「耽羅は即ち耽牟羅なり」は、すなわち「舩羅は即ち舩牟羅なり」ということになります。したがって、『隋書』倭國伝の舩羅國と『隋書』百濟伝の舩牟羅國は同一の国を指していると考えます。中国史書に従うかぎり、これが当然の帰結です。

また、先に示したとおり、『隋書』倭國伝では、竹島から南に舩羅國を望むとされます。「望む」とははるかに隔てたところの遠くを見る、眺めやるという意味であり、竹島の辺りから見えるところに位置しなければならないことなど、これまであらゆる角度から、舩羅國は朝鮮半島に近い済州島であるとするのが適切であると示しました。

『隋書』百濟伝の舩牟羅國も、ノロジカの生息とともに戦船の帰航の経路や黒潮の海流などの点から済州島の可能性が高いことを示しました。

史書名	国名
後漢書	州胡国
北史	耽牟羅
隋書	跕牟羅
隋書、元史、書記	耽羅
隋書、新唐書	儋羅
隋書	屯羅
齊明記	都耽羅
物名考	担羅
東都成立記	托羅
海東安弘記	毛羅

なお、このほか、中国史書にある済州島に関する呼び名は、表のとおりです。

そして『三国史記』百濟本紀の記述「耽羅は即ち耽牟羅なり」は、まさに「耽羅」＝「耽牟羅」＝「舩羅」＝「舩牟羅」＝「済州島」を決定づけるものです。以上により私は『隋書』倭國伝の舩羅國と『隋書』百濟伝の舩牟羅國は、ともに済州島を指していると思います。

『後漢書』を除けば、その読みは「たんら」「たんむら」「とんら」など、舩羅や舩牟羅の読み に似ており、同じ地名を指していることを支持していると思います。

7 海行三月

其南海行三月有舩牟羅國 南北千餘里東西數百里 土多麋鹿附庸於百濟 百濟自西行三日至貊國千餘里云 (『隋書』百濟伝)

その南、海行三月に舩牟羅國があり、南辺、北辺が千余里、東辺、西辺が數百里、土地には麋鹿^{ノロジカ}多く、百濟に従属す。百濟を西より行くこと三日、貊國に至るに千余里と云う。

『隋書』百濟伝で記述される舩牟羅國について、「南海行三月」と記述されていますから、舩牟羅國は、百濟から相当南の方にあるとする考え方があります。これは「南海行三月」を直感的に“遠い”と捉えた現代人のイメージであると思います。

『隋書』百濟伝の舩牟羅國に関する記事だけを取り上げて、三ヶ月かかるので百濟から遠方にある南方の国と単純に考えるのはいかがなものでしょうか。

私は、中国史書の記述内容で、現代の常識で理解してきた文言や記述方法が、実は全く異なる意味を持つと示したことがあります。『隋書』百濟伝の舩牟羅國の大きさを示した記述「南北千餘里東西數百里」について、私たちは、これまで「南北の長さが千餘里、東西の長さが數百里」とする常識的な解釈をしてきました。しかしそれは間違いであることを私は、「東海の古代」138号(2012年2月)の「東西五月行南北三月行について」で明らかにしたつもりです。

「南北千餘里東西數百里」は縦長の区域を表し

ているのではなく、正しくは、「南辺、北辺の境界の長さが千余里であり、東辺、西辺の境界の長さが数百里」の横長の区域であることを示しました。

常識と考えられてきたことが本当に正しいのか、文献に照らし合わせ、再度検討すべきです。

というのも百済から舩牟羅國までかかる時間を『隋書』百済伝では、たしかに「海行三月」であると記述されます。

しかし、『唐會要』耽羅伝には、耽羅すなわち百済伝でいう舩牟羅國、そこから百済まで、次のように「五日行」ばかりとあります。

耽羅在新羅武州海上居山島上周迴並接於海北去百濟可五日行

(『唐會要』耽羅伝)

耽羅は新羅武州の海上、山島の上にあります。周りを廻るに並めて海に接す。北に去ること百済まで五日行ばかりなり。

つまり『隋書』百済伝の「海行三月」と同じ地点間、百済と舩牟羅國(耽羅)の長さを『唐會要』耽羅伝では「五日行」とされているのです。

百済から舩牟羅國までの「海行三月」を正確な月数、すなわち海に行くこと三ヶ月と理解するならば、『唐會要』耽羅伝の「五日行」が間違いであり、また、『唐會要』耽羅伝の「五日行」を正しいとするならば、『隋書』百済伝の「海行三月」は間違いであるというように考えてしまいがちです。また、どちらか一方だけを信頼できると採用したり、また、ともにいい加減な記述であると主張される方もいるでしょう。

私は、こうした考え方に反対です。

たしかに水上の距離を正確に測ることができなかったので里数を書かずに月数や日数で表現したということもありましょう。しかしながら、中国史書の事例を調べると、水上の距離といえども里数で記述されているものも次の例の通りあり、一概には言えない面もあると思います。

K 又南郡去州海行千有余里

(『晋書』陶璜伝)

L 自東萊出石經襄和龍海行四百余里

(『晋書』陶璜伝)

M 南夷林邑国在交州南海行三千里

(『南齊書』林邑伝)

N 其水路自安南府南海行三千餘里至林邑

(『旧唐書』地理志)

私は、『隋書』百済伝の「海行三月」も、『唐會要』耽羅伝の「五日行」も、誤った記述ではないと考えます。

私は、その地点に行くまでに実際にかかったり想定されうる月数や日数が表現されているのだと考えます。

次にその事例を示します。

在安息条支西大海之西 從安息界安谷城乘船直截海西 遇風利二月到風遲或一・無風或三・其国在海西

(『魏略』西戎伝)

安息、条支の西にある大海の西に(大秦国)あり。安息の境界に従って行き安谷城で乗船し海西に直截す。風利に遇えば二月、風遅ければ或いは一歳、風無ければ或いは三歳で到り。

安息はパルティア、現在のトルクメニスタンで、条支はシリアとされ、その安谷城、現在のシリアのアンタキヤから地中海を西へ進み大秦國へ行く行程についての記事です。大秦國とは、ローマ帝国を指すとされます。

大秦國は安息と条支の西にある大海の西にあるとされ、当時のローマ帝国の首都は、現在のミラノとされますので、この航海はアンタキヤからミラノ辺りを指していると思われます。

大秦國に派遣された甘英は、安息を経て条支まで行きましたが、大海である地中海の航海がたいへん困難であると聞いて引き返したとされます。

この『魏略』西戎伝の記述で重要なのは、安谷城から大秦國へ大海を航海するのに、風向きが良ければ二ヶ月で行けるところが、風の状況によっては一年さらには風がなければ三年かかることを示しています。つまり二ヶ月で行けるかもしれないが、場合によっては三年かかるかもしれないとされる点です。3年は36ヶ月ですから36ヶ月/2ヶ月で18倍ですので、風の状況によっては18倍もの時間がかかることになります。

『隋書』百濟伝の「海行三月」と『唐會要』耽羅伝の「五日行」の場合は、3ヶ月を90日とすれば、90日／5日で、やはり18倍となります。『魏略』西戎伝の18倍の違いが生ずるとする事例は、この百濟と濟州島のかかる時間の違いが、決してあり得ないことではないことを示しています。

百濟から濟州島に行くには海流に逆らうことになり時間がかかることが想定されますし、逆に濟州島から百濟へは海流に乗っていけることから速く到着できると思われ、記述内容は海流の向きを考えると理解できると思います。

『隋書』百濟伝の「海行三月」と『唐會要』耽羅伝の「五日行」のどちらかが間違いであると切り捨てるのは、中国史書に記述された内容を理解しようとしなない現代人のエゴではないでしょうか。

「南海行三月」の記述だけを信頼して、舁牟羅國は、百濟から遠く離れた南方の国とする考え方には、あらためて問題があることを指摘しておきたいと思います。

8 百濟について

先に示した『隋書』百濟伝では 百濟について 次のように記述されます。

百濟自西行三日 至百濟千餘里云

(『隋書』百濟伝)

百濟を西より行くこと三日、百濟に到るに千餘里という。

百濟の位置について諸説あるので、私の考えを整理しておきます。

通説では、「百濟より西へ行くこと三日、百濟に到るに千餘里」と読み下します。通説の「百濟より西へ行くこと三日」とすると、百濟は朝鮮半島の西の方や、黄海の中の島にあることとなります。が、これは「自」の置かれた位置や使われ方を無視した誤った理解であると思います。「自百濟」と記述されていれば通説のとおり「百濟より」と読み下すのはわかりますが、ここでは「自西」ですので「百濟を西より行くこと三日」と理解すべきだと思います。

私が述べたいことを理解していただくために

詳しく記せば「百濟の西から東の方へ行くこと三日、千餘里で百濟に到る」ことを表現していると思います。この私の理解を支持するのが『山海經』の記述です。

百濟について、『山海經』では次のように具体的に記述されます。

百濟在漢水東北 地近于燕 滅之

(『山海經』海内西經)

百濟は漢水の東北に在り。地は燕に近く、之を滅ぼす。

『三国史記』百濟本紀には、河南に百濟（十濟）の都を築く際の話として

惟此河南之地 北帶漢水 東據高岳 南望沃澤 西阻大海

とあります。ここで河南は、漢江を挟んでソウルの東にある現在の河南省と考えられますので、この漢水は現在の韓国の漢江です。百濟は、その漢江の東北に位置するのです。また燕は朝鮮半島の付け根辺りまで領土がありそれに近いということから、百濟は朝鮮半島の中央、春川やその北部の辺りということになりましょう。百濟は、百濟の西や黄海の中ではなく、漢江の北東、朝鮮半島の中央に存在すると考えます。



漢江、河南、春川

9 まとめ

- (1) 『隋書』倭國伝の記述にある百済から倭國に向かう航路、および朝鮮半島南西部に竹島の地名が現存することの2つの根拠から、『隋書』倭國伝の竹島は、朝鮮半島の南西部にある。
- (2) 『隋書』倭國伝の聃羅國は、竹島から望む位置にあるので、目視できる濟州島と考えられる。
- (3) ノロジカの生息区域、戦船の帰航の経路、黒潮の海流方向、戦船の漂着した聃牟羅國は海東にあることの4つの記述内容から、『隋書』百済伝の聃牟羅國は、濟州島と考えられる。
- (4) 『三国史記』新羅本紀の耽羅國は、百済や新羅の属国であり朝鮮半島に近い位置にあると考えられる。
- (5) 『三国史記』百済本紀の記述「耽羅即耽牟羅」から耽羅は耽牟羅と同一である。
- (6) 「耽」は「聃」の異体字とされるので、耽羅は聃羅、耽牟羅は聃牟羅と同一である。
- (7) したがって、『隋書』倭國伝の聃羅國と『隋書』百済伝の聃牟羅國は同一の国を指している。
- (8) 『魏略』西戎伝では、安谷城から大秦國までの航海は条件が良ければ二ヶ月であるが場合によっては三年かかり、それは18倍の差があることを示している。
- (9) 『隋書』百済伝の「海行三月」、『唐會要』耽羅伝の「五日行」は、18倍の差があるが、『魏略』西戎伝の事例から、あり得ることであり、百済と濟州島の間の実際にかかったり想定されうる月数や日数が表現されている。
- (10) 以上を整理すると『隋書』倭國伝の竹島は朝鮮半島南西部に位置し、その竹島から望む聃羅國と『隋書』百済伝の聃牟羅國は、同じ国を指し、それは濟州島である。

以上のとおり、『隋書』倭國伝の竹島と聃羅國の位置を明確に特定できたと考えます。

倭人の二倍年暦と暦

名古屋市 佐藤章司

日本の古代史の特徴のひとつに、一年に2歳年をとる「二倍年暦」が存在していたが、以下はその証明を試みたものである。上のタイトルと同名のを「古田史学の会・東海」24年2月例会で発表しているが、それを今回、一部修正を加えている。

1、倭人の二倍年暦

A：其の人の寿考或いは百年或いは八、九十年。

（『魏志倭人伝』）

B：その国、本また男子を以って王となし、住まること七、八十年（王の在位年数）（『魏志倭人伝』）

これと対となる記事のその痕跡が『古事記』、『日本書紀』でも記す歴代の天皇の“長寿”記述だと思う。

『古事記』の事例

応神130才・仁徳83才・允恭78才・雄略124才

『日本書紀』の事例1

仲哀天皇崩御52歳、在位9年
神功皇后崩御100歳、在位69年

この年齢からして当時（仲哀時代）は倭国固有の二倍年暦が使用されていたと思われ、一倍年暦では仲哀は26歳、神功は50歳で崩御した。

この場合不自然さを感じるのは

① 神功皇后が摂政になった年齢が二倍年暦では31歳であり、一倍年暦では15.5歳になることである。

② 神功摂政14～38年の24年間記事のない空白期間がある。これは神功皇后摂政39年（239）を時間の定点とし、景初3年（239）の卑弥呼の朝貢としたための反古でありそれを埋めるために在位期間を引き延ばした結果であろう。

『日本書紀』には二倍年暦とは別に時間の引き延ばしがある。という視点が必要である。

『日本書紀』の事例2

神武紀に、神武天皇は45才の時に東進し127才で崩御されたと記述されているが、これは倭人の二倍年暦で記述されているため、実年齢は22才の血気盛んな青年時代に東進を始め、63才で崩御した。

ただ、15歳での立太子は『日本書紀』編纂時に一倍年暦の世界で生きていた編纂者の手によって書き加えられたものであろう。

すなわち『日本書紀』編纂者は二倍年暦を知らなかった。ということになる。

C：其の会同の坐起には、父子、男女の別無し。人の性、酒を嗜む。魏略に曰く、其の俗、正歳四節を知らず。ただ、春耕秋収を計りて、年紀と為す。

と裴松子の割注が挿入されている。

この様に日本の古代では左に記す春耕で年が始まり又、秋収で年が始まる。これが倭人の年紀であり、この際に必ず春祭りがあり秋祭りがあり、神に酒を捧げ神と共に嗜んだであろう。これが倭人伝に記す人性嗜酒であり、そして祭りの前には禊祓みそぎはらえがあり、罪や穢れを流し去って身を清めて臨んだはずである。この習慣は「6月30日」と「12月31日」に毎年、執り行われるとして今日まで残っている。この様

に倭人の世界では「二倍年暦」が実際に使用されていた。

これが『魏略』の言う“正歳四節を知らず”であろうし、『魏志倭人伝』や『古事記』・『日本書紀』の記す天皇や倭人の長寿記事である。

D：卑弥呼の宗女壺与十三なるを立て王となす、國中遂に定まる。（『魏志倭人伝』）

さて、13歳に壺与はこの時、一倍年暦の「13歳の少女か?」、それとも倭人の「二倍年暦」の「6.5歳の幼児か?」張政は直接壺与に会って、激を以て告諭しているのであるから13歳の少女と6.5歳の幼児とを見違えることなどあるはずがない。

又、壺与は、泰始2年（266）に中国に使者を派遣し、倭国に20年間滞在していた張政らが還るのを送らせた。この時、壺与33歳であって、万に一にも見間違ふことなどあり得ない。又、張政を通して倭人も中国での正月一日の祝賀を知るようになったであろう。このように、倭人の「二倍年暦」の発見者は正始8年（247）に来倭した張政であり、この張政の「倭国報告書」が『魏志倭人伝』や『魏略』の情報源となっている。

一倍年暦と二倍年暦の比較表

一倍年暦	二倍年暦
正月一日を年の始めとする	春耕・秋収で其々年の始めとする
一年は十二月	同左 (注3)
一月はおよそ三十日	一月はおよそ十五日 (新月～満月、満月～新月) (注1)
日と夜を合わせて一日	同左。 これは倭建命の説話から理解出来る。 (注2)

注1 『古事記』の天皇崩御年月日のしられている15人の天皇の内、全てが15日以内となっている。『日本書紀』は4世紀の人物である神功皇后を3世紀の倭の女王とし、『日本書紀』の時間軸の定点としたため完全な「二倍年暦」ではなく、時間を引き延ばした“二倍年暦”もどぎ”となっている。故に16日以降の日もあり得る。

注2 ①『古事記』（倭建命説話）から

すなわち、その国より越えて甲斐にいでまして、酒折宮に^{いま}坐しし時、歌ひたまはく、
新^{にいばり}治^{つくは} 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる (26)

と歌ひき。ここにその御火焼の老人、御歌に續きて歌ひて日く、
日日並べて 夜には九^み夜^ひ 日には十日^{とをか}を (27)

と、歌ひき。ここを以ちてその老人を誉めて、即ち東^{あずま}国造を給ひき。

(講談社学術文庫『古事記』148頁)

さて、上の「夜には九夜 日には十日」は9泊10日のことであり、当時の陸路がどんな状況であったのかは不明であるが、おおよそ常陸国の新治・筑波から甲斐の酒折宮までの所要日数として妥当と思われる。これは一倍年暦でみても「二倍年暦」でみても、「一日＝日＋夜」なので9泊10日である。

②『魏志倭人伝』から

不弥国から南へ水行して20日、投馬国に至る。5万余戸ばかり。 (『魏志倭人伝』)

上の水行20日を、『俾弥呼』(古田武彦著) 216～218ページでは、

端的に言おう。「この『二十日』は、倭人側の『二倍年暦』による記述である。」と。…… 通例の「中国側の表記」では「10日間」に相当しているのである。

と記述されているが、上に記したように、この20日は一倍年暦でも「二倍年暦」でも同じ20日である。

注3 太陽の高度が最も高くなる夏至や低くなる冬至のあること、当時の倭人は当然知っていたであろうし、繰り返し周期を以てやってくることもまた知っていたこと、当然であろう。

アジアモンスーン地域にあって、春夏秋冬に恵まれ日本固有の自然美を持った日本文化の基底に豊かな四季がありますが、3世紀、魏使の見た倭人の世界は四季の伝統や生活様式では無く、むしろ、一年を耕・収の二期に分ける生活形態を持っていたようである。これは元々、倭人はこの日本列島の住民ではなくて南方系海洋の民の二倍年暦の地から、その北限地帯である日本列島の水田稲作地帯へ「二倍年暦と楔と鯨面・文身や倭人語」を持って侵入し支配した。そして海人が大人、稲作民が下戸になり、大人と下戸の上下の階層が発生していた。この倭人の原郷は黒潮の流れ来る先にある「常世の国＝二倍年暦の国」であろうか。^{*1}

この様に、倭人の世界では「二倍年暦」が使用されていて、実際に『古事記』や『日本書紀』にも「二倍年暦」を前提とした説話(各天皇の長寿等)として語られているということを考慮して紐解くことが必要であろう。

E: 倭王武の昇明2年(478)の朝貢の際の

上表文に

窃かに自ら開府義同三司^{ひそ}*2を仮し、その余は威な仮綬して、以って忠節を勧む。

(『宋書』倭国伝)

と記述され、「倭国都督府」として三司の儀式を執り行うために暦をこれまでの倭国の「二倍年暦」から宋で行われていた「元嘉暦」を取り入れたことではなかろうか?

宋の朝廷の儀式の中に正月を賀すること必ずあったであろう。その際には“倭国都督府”で都督でもある倭王武が宋の朝廷に合わせた年賀の儀式があったこと疑い得ない。倭王武～多利思北孤に連なる九州王朝が元嘉暦の使用を始めていた。

F: 正月一日に至るごとに、必ず射戯・飲酒す。その余の帝はほぼ華と同じ。 (『隋書』倭国伝)

この倭国の生活の様相は3世紀の倭国の「二倍年暦」から正歳四節を知り、すっかり「一倍

*1 二倍年暦の国: 二倍年暦の原郷を古田説ではパラオを含む太平洋領域とする

*2 開府義同三司: 受ける儀礼が太尉・司徒・司空と同じ。

年暦」になっていたことが読み取れる。

2、倭人の暦について

『日本書紀』等から暦についての記述を拾い出すと

- ① 欽明14年(553)、暦博士の任期が切れたので交代の博士を派遣するように百済に使者を送る。
- ② 欽明15年(554)、百済から暦博士固徳王保孫らに交代する。(前年の要請に対して来日)
- ③ 推古10年(602)百済から観勒という唐僧が暦本・天文地理書・遁甲方術の書をもって来日。暦法については玉陳という人物が習う。
- ④ 持統4年(690)元嘉暦(宋の元嘉年間に出来た暦)と儀鳳暦(唐の暦で儀鳳年間に伝わったもの)を併用して使用する。
- ⑤ 文武元年(697)儀鳳暦を採用する。(『続日本紀』)

とあり、いくつかの疑問が生じます。それを列挙すると

- 1) 欽明14年以前には既に暦が伝わり使用されていたものと思われる。しかしその記述がない。

このように考えないと暦博士の交代などの必要が生じない。『日本書紀』編纂者は当然疑問にも思い調べたのでしょうが、それは記載されなかった。

では、なぜ暦が初めて伝わったことが『日本書紀』に記載がないのか?を推察すると、この①～③の記述の元史料は九州王朝の史料であって、それを入手出来たものは記述し、欽明14年以前の暦記事は入手出来なかった。だから記述されていない。と考える以外にな

- 2) 持統4年11月の勅で元嘉暦・儀鳳暦の併用使用記事

甲申 奉勅始行元嘉暦與儀鳳暦

は、同一時間帯に同一場所での暦の併用施行は大混乱を生じるだけであり、これはあり得ない。690～697の7年間は、九州王朝と大和王朝の「一国二体制」だった。盛況していく大和

王朝と瓦解していく九州王朝があった、ということ。

本来は儀鳳暦の使用を持統天皇の支配領域で初めて使用した。それまでは九州王朝の配布されていた元嘉暦が使用されていた。それが石神遺跡から出土した木簡が語っている。

5世紀、宋との交流は「倭王武の上表文」によっても覗えるが、その交流の結果、暦についての認識とその必要性が生じ、宋で作られた元嘉暦の使用が始まったものであろう。

そして文武元年(697年=九州年号では大化3年)、倭国(九州王朝)を併合し統一した(名目的には大化6年)大和王朝が九州王朝のものであった元嘉暦を捨て、文武元年(697)に儀鳳暦を採用し、大宝元年(701)に律令で施行したのであろう。

この時(697年)、文武天皇は真人の名を持つ天武及び持統天皇を引継ぎ「天つ皇^{あま すめろぎ}=九州王朝の天子」ではなく、九州王朝の宰相であったと考えられる。それが697～700まで年号を持っていない理由であり、他方この時には九州年号の「大化(695～701)」年号を持つ天子がいたということである。

3、要約

1, 2に述べたことを以下に要約する。

日本(倭国)の古代は「二倍年暦」であった。倭の卑弥呼や壺与の女王を大和王朝に取り込む為に4世紀の「神功皇后紀」の中に取り込んだ。その結果、『日本書紀』の暦は時間が引き延ばされて“二倍年暦もどき”となってしまった。これを『日本書紀』編纂者は当時の暦である儀鳳暦にあてはめて編集した。これが『古事記』と『日本書紀』で天皇の寿命に違いが生じている理由である。

他方、倭王武が始めた元嘉暦は伝播時間を経て大和王朝にも取り入られて元嘉暦で記録されていた。この記録を利用して『日本書紀』の後半部が編集された。これが『日本書紀』の前半部が儀鳳暦で後半部が元嘉暦となっている理由である。

有坂隆道著『古代史を解く鍵』の 持統4年奉勅記事について

—古代史覚書帳—

瀬戸市 林 伸禧

『日本書紀』持統4年11月條の
十一月甲戌朔 …… 甲申 奉勅始行元嘉曆與
儀鳳曆

について、有坂隆道氏は

ところで、岩波本の頭注に「国として正式に曆法
を採用したのは持統朝だ」というのは、『日本書紀』
の持統四年(六九〇)十一月条に、
十一月の甲戌の朔……甲申に、勅を奉りて始めて
元嘉曆と儀鳳曆とを行ふ。

とあるのが、それです。この文章は難解だといわれ
る方がおられますが、そんなことはありません。三
つの曆を併用するのがおかしいといわれますが、
われわれも同じようなことを明治以来、現にやって
きたではありませんか。新曆と旧曆です。

(下線は筆者。 『古代史を解く鍵』26頁)

と述べています。

わが国では、明治政府が明治5(1872)年
に「太陰太陽曆」から「太陽曆」に切り替えま
した。ですが、一般庶民は日頃慣れ親しんでい
た「太陰太陽曆」をも用いていました。権力者
が使用を命じた曆は「太陽曆」の1種類です。

持統4年の奉勅による曆は、「元嘉曆と儀鳳曆」
の2種類です。

有坂隆道氏は、明治時代では実質的に併用し
ていたと述べています。問題なのは、権力者が
使用を命じたのが、1種類か、あるいは2種類
かです。この点で、有坂隆道氏のコメントはピ
ントがずれていると思います。

8月例会予定

日時：8月19日(日) 午後1時30分～5時
場所：名古屋市市政資料館(第4集会室)

Tel:052-953-0051

名古屋市東区白壁1丁目3番地

参加料：500円(会員無料)

交通機関

- ・地下鉄名城線「市役所」駅下車、東徒歩8分
- ・名鉄瀬戸線「東大手」駅下車、南徒歩5分
- ・市バス「市政資料館南」下車、北徒歩5分
- ・ 「清水口」下車、南西徒歩8分
- ・ 「市役所」下車、東へ徒歩8分

駐車場

- ・名古屋市市政資料館：12台収容(無料)
- ・ウィルあいち(愛知県女性総合センター)地下
駐車場：南隣、有料(30分170円)
- ・鈴木不動産コインパーク：南東角交差点の東、
有料(40分200円)

今後の予定

9月例会：9月23日(日)名古屋市市政資料館

10月例会：10月21日(日) 〃

例会は、9月は**第4日曜日**、10月は**第3日**

曜日です。

参加費：500円(会員は無料)

名古屋市市政資料館：

○交通機関

- ・地下鉄名城線「市役所」駅下車、東方向徒
歩8分
- ・名鉄瀬戸線「東大手」駅下車、南徒歩5分
- ・市バス「市政資料館南」下車、北徒歩5分
- ・ 「清水口」下車、南西徒歩8分
- ・ 「市役所」下車、東へ徒歩8分

○駐車場

- ・名古屋市市政資料館：12台収容(無料)
- ・ウィルあいち(愛知県女性総合センター)地
下駐車場：南隣、有料(30分170円)
- ・鈴木不動産コインパーク：南東角交差点の
東、有料(40分200円)

古田先生とその学問に興味のある方ならど
なたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連
絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。

例会での研究報告、見解発表は大歓迎です。
資料を配布される場合は、「**20部**」ご用意い
ます。